中国人教師からみた国際交流

―語学教育を通して―

張　　岩　紅
（大連外国語大学 日本語学院・北九州市立大学 交換教員）

キーワード

グローバル化　民族性　視点　翻訳　リズム

要　旨

From the beginning of its history ,China has been a nation of many ethnic groups ,and compared with other countries its total population is rather large. Compared with China , Japan is in principle a country made up of essentially only one ethnic group and compared with its land mass ,if has a rather large population of 130 million people ,making if the 10th most populous country in the world.For different reasons ,both countries with the progress of time have come to face globalization at present , in this paper seeks to clarify issues facing both countries with regard to ethnicity and globalization and seeks to define differences in approach between the positive ness of Chinese and the care for detail exhibited by Japanese.

1．はじめに

中日両国はともに東アジアに位置し、両国民はともに黄色人種である。しかし、両国で教えた語学教育を通してみると、その民族意識はかなり違うようである。たとえば、中国では分からないところがあれば、学生はよく質問をするが、日本ではほとんど質問がない。授業中、一つの単語をとりあげて学生に文を作らせる時も、中国人学生は文を作り積極的に自分の考えを発表するが、日本人学生は教師が指名しない限り黙っている。指名されれば答える。会議の席上でも、中国人は一般に自分の意見を主張するが、日本人はあまり主張しないで、人の意見をよく聞いている。食事のときも中国人はみんなで賑やかに楽しそうに食べるが、日本人は黙っ

てなるべく音もたてないように食べる。中国人の積極型と、日本人の慎重型はどこから来ているのであろうか。

2. 中日両国の民族性

一般的に言えば、中国人は明るく積極的で、どういう場面であれ、自分の意見をよく言う。些細なことであっても、よく自分の意見を主張する。双方に衝突があってもあまり気にしない。喜怒哀楽が激しく感情を表面に出す傾向にある。日本人は静かで周りの意見をよく聞いていて、その場の全体の雰囲気を重んじ、相対的に良いと思える有力な意見に賛成し、意見の食い違いを恐れるのか、自分の意見はめったに言わない。感情を内面に抑え込む傾向にあるようである。これが中日両国民の一般的な傾向[1]であろう。

2.1. 自然環境による民族性の違い

中国は広く、北京のように四季のあるところもあれば、東北のように冬が長く夏の短いところや広東のように夏が長く冬の短いところもある。また常春の昆明や常夏の海南島などもある。さらに、トルファンのように50度を超すところもある。日本に比べると、四季のある北京でさえ、どちらかというと厳しい気候である。北京の夏はしばしば35度を超え、冬は零下15度前後である。まして、ほかのところは言わずもがなである。日本も四季があるが、どちらかというと一年中温暖で、東京は夏も35度を超すことはめったになく、冬も零下になることはめったにない。かなり寒くなっても零下3，4度であろう。

中国人は一般にかなり大声で話すが、日本人は小声で話す。日本人が中国人の話しているのを聞くと喧嘩をしているように思えるらしい。一方、中国人が日本人の話しているのを聞くと、小声で何か人の悪口を言っているのかなと思えるらしい。それでも日本語を勉強している中国人は、日本人の影響を受けて小声で話すようになり、静かにものを食べるようになる。中国語を勉強している日本人も、一般の日本人に比べると、よく発言するようになり比較的自分の意見を言うようになる。これらは学習をしている言語や文化の影響であろう。

中国の大学でいちばん美しいと言われている大学は厦門大学である。なぜこの大学が2000以上ある大学[2]のなかで、中国ではいちばん美しいと言われているのであろうか。それは広い敷地に“有山有水”〔山や湖〕があり、校庭では小鳥がさえずり、湖面では黒鳥が湖水では魚が優雅に遊び、人類の英知を窺わせる現代的な中国風の建物と広いグラウンドがあるからで

[1] ネット調査によれば、中国の学生により日本人の「マナーのよさ」と「思いやり」が挙げられている。
[2] ネット調査によれば、2012年現在、中国の大学の総数は2442校である。

ある。中国人は一般に自然環境と人間の作る文明文化とが調和の取れているのが好みのようである。

日本の大学を見てみると、さほど広くはないが、どの大学にも敷地には現代的な使いやすい建物があり、それが中心となっている。学生は必要な書類があれば、事務棟に行き機械の前でお金を入れ必要なボタンを押せば、書類が自動的にとれる。また、山を代表する木はかなりあるものの、水を代表する湖は無い。たまに小鳥を見かけるが動物もさほど多いわけではない。日本では大学の便利さと教室の使いやすさが一番重要視されているようである。現代的な住居もよく似ている。中国の庭やマンションの一室も日本のそれとくらべると比較的広い。ただ、日本の方が便利なようである。

このような広い土地と多様な民族[3]のいる中国人は大声で話し、身振り手振りを加えて、自分の意見をよく主張する。不満があれば、よく文句を言う。それに対して、比較的狭い国土と原則として単一民族からなる日本人は自分で意見を言うのではなく、いちばん良いと思える他人の意見に賛成する傾向にあるようである。不満があっても、全体の「和」を重んじ、ほとんど我慢してしまうようである。

2.2. 社会環境による民族性の違い

中国は人口が多いのが特徴である。何でも競争である。特に大学入試は難しい。名門大学に入ろうとすれば、小学校時代からトップでなければ入れないであろう。中学や高校では放課後も補習授業や自主勉強があるので、夜10時前に帰宅したら、まず名門大学には受からないであろう。大学に入っても同じことが言える。人数が多いので、昼食時、食堂へ行くのが遅くなると気に入ったオカズはほとんどなくなっている。学生数が多いからである。それでも、まあまあのオカズでよければ何とか食べられ、オカズがなくなることはない。日本は人口密度が高いが、学生数がさほど多くないので、これまでの経験から言えば、大学の食堂で気に入ったオカズがなくなることもなく、まして食事が無くなるなどということはありえない。だから食堂へ遅くいってもあまり問題がない。

中国は自由競争になった現在、何でも競争である。就職もかなり厳しい競争を勝ち抜かなければならない。日本では毎年約56万人[4]が卒業する。日本もかなり厳しい競争はあるようだが、就職先は何とか見つかる。2016年度3月の大学卒業生の就職率は97,3％なので、一般には就職を希望する学生は、誰もが就職できるようである。これは中国人から見ると驚異的な数字である。中国では毎年約611万の学生が卒業する。このうち、卒業時に就職できるのはおそらく

---

[3] ネット調査によれば、中国の国土面積は約960万平方キロメートル。民族は漢民族以外に55の少数民族。
[4] ネット調査によれば、2015年度は日本の大学卒業生数は約56万人、中国は約611万人。

三分の一強であろう。だから、中国人の学生は勝ち残り、就職するために、勉強もよくやるし、いろんな社会活動も積極的である。そうしなければ就職が難しいからである。

2.3. 歴史による民族性の違い

一般的なことだが、中国では重要文化財を修復するとき、作られた当時の原色によって全体を修復する。日本は周囲と調和のとれた時代の経過を感じさせる古さで、問題の発生した一部を再現する傾向にある。ここにも文化観の違いが出ているようである。

中国は革命を認めている国[5]なので、封建王朝もしばしば変わる。劉邦や朱元璋のような、民衆の側に立つ王朝がぞくぞく誕生する。下層階級から革命の嵐が起こってくる。日本は革命を認めていないようである。軍事力のある武士集団が武力闘争によって勝利を修め、その土地を支配する。江戸時代以降はその範囲が日本全体に及んでいる。だから、一般庶民は統治階級の意見をよく聞くようである。

時代劇を見ると、優れた領主がいて、城を中心として城下が発展しているようである。現在NHKで放映されている『真田丸』もそういう感じがする。今では放映されていないが、長寿番組の一つ『水戸黄門』も優れた指導者が一般庶民の側に立ち一般庶民を助けてくれるような物語の展開と記憶している。中日両民族のモノの考え方の違いは、ここにかなりはっきりと表れているようである。中国人がよく意見を言うのも、日本人がよく上司の意見を聞くのも歴史的な産物のようである。

3. 翻訳上の問題について

中日両国の外国語教育は伝統的に教育の重点が異なるようである。中国では会話を中心とする実用教育に重点が置かれ、日本では文法や翻訳を中心とする理論教育に重点が置かれてきたようである。グローバル化からみれば、会話も翻訳もともに重要であるが、2016年10月現在、外国人観光客が年間2000万人を超えた日本では、これからは会話が一層重要視されてくるであろう。

会話は外国人と直接会って話をする場合、お互いの意思を交流する手段としての外国語は欠かせないものである。外国語で初めて外国人と話せたときの喜びは経験したことがなければ分からないだろう。日本には2016年現在、外国人が観光でたくさん来ている。特に中国人が多いようである。習った中国語を使って話しかけてみるといいと思う。中国人は日本人から話し

[5] 日本の明治維新以前は儒教の『論語』の思想が基本となっている。『孟子』は革命思想があるので、広まらなかった。

かけられると、きっと喜ぶだろう。会話こそ外国人と直接話し合える直接の手段である。その後は必ずもっとしっかりと勉強しようと思うに違いない。

翻訳は非母語を母語に訳すことにより、当該の母語話者は他民族のものの考え方や他民族の風俗習慣や芸術などを知り、世界観を広めることができる。翻訳は世界の民族がお互いに相手を理解し、自分を主張する場合、また世界の民族が共通の理念を持つため、さらにそれぞれがグローバル化を目指す場合に欠かせないものである。翻訳を通じ、世界を知ることができ、世界の広さと深さを知ることができる。それによって自分自身と自国を見直すことができ、世界は一つという理想を実現するための一つの手段と言えるであろう。それだけに翻訳は重要であり、翻訳の力は計り知れないものである。

中日両言語では一般には対応しているものの、場合によっては対応していない場合がある。対応していない言語現象は日常生活によくみられる。たとえば、基本語の“来”と“去”は、話者の方に近づいて来れば“来”を使い、話者から離れて行けば“去”を使う。日本語の「来る」と「行く」も同じように使われるが、そうではない場合もある。以下の例文を見てみよう。

(1) 也不知是哪个最先叫的，见阿浓过来，喊了声“‘拖鞋’来了。”（『人民』94 － 1 － 93）
だれが一番先に行ったのかわからないが、阿濃がやってくるのを見た者が、「スリッパが来るぞ」と叫んだ。（同上）

(2) 帕兰卡：喂，小张，我们在这儿呢。／ねえ、張さん、私たちここよ。
张华光：我们就来。(对哥哥）哥哥，他们已经进去了，咱们也进去吧。(他们走进公园)
すぐ行きますから。（兄に向って）兄さん、あの二人はもう公園に入っているよ。ボクたちも入ろうよ。（二人は歩いて公園に入る）（『実用』2 － p.232）

(3) 进门便钻进卧室，出来时空提包张着嘴，像一只踩破风干的鱼泡。（『人民』88－11－89）
戸口から寝室に直行、出てきたときの空のカバンは口を開けたまま。踏み破られ、ひからびた魚の浮き袋のよう。（同上、88 － 11 － 90）

(4) 丽莎笑得眼泪都出来了。（『人民』95 － 3 － 99）
麗莎さんは涙が出るほど笑った。（同上）

(5) 他们出来跳舞。一般都需要撒谎。（『人民』95 － 6 － 99）
かれらがダンスに行くときは、たいていウソが必要だった。（同上）

例 (1) の“来”は「来る」と訳されているので、中日両言語が対応している場合であり、“来”「来る」の用法は基本どおりであり、こちらに向かってくる場合に使う用法である。これを「基本訳」[6] という。例（2）の“来”は「行く」と訳されているので対応していない場合である。

[6] 今冨正巳（1995）は翻訳の要領として、「倒訳、加訳、不訳、分訳、変訳」を挙げている。本書は科学的に翻訳を捉えた専門書として高く評価され、中国でも翻訳されている。

これは中国語や英語に見られる用法である。親しい関係にある人は例（2）の“我们就来。”を使うが、一般的な関係であれば、“我们就去。”と言う。中国語や英語では言葉のなかにも人間関係が現れている。親しい人間関係は心理的に相手に近いから、相手の立場に立って“来”を使うのであろう。日本語も方言（九州や山陰地方）のなかにはこの用法があるが、筆者の知る限り標準語の中にはない。

例（3）から（5）までは“来”の前に動詞“出”が用いられている場合である。例（3）は「出てきた」と訳されているので、中日両言語は対応している。例（4）は“出来”が「出る」と訳されているので、中日両言語は対応関係になっていない。これは「麗莎さんは笑うと涙さえ出てきた。」とも訳せる。こう訳せば、中日両言語は対応する。しかし、日本語のレベルから見れば、直訳は翻訳しているだけであって、基本的な意味は伝えられるが、日本語としてはかなり幼稚である。やはり例（4）の訳文の方が優れている。例（4）はいくつかに訳せる訳文の中で、そのうちの一つを選ぶ訳出法であり、筆者はこれを「選択訳出法」[7] という。この訳出法は訳者のセンスが問われる訳出法である。例（5）は“出来”が「行く」と訳されていて、中日両言語は対応関係になっていない。この文では中日両言語に視点の違い[8] のあることを窺わせている。中国語は目的が重要であれば、目的地に視点をあてるのが一般的なので、“跳舞厅”の方に視点をあて“出来”を使うが、目的が一般的であれば、“他们常常出去唱卡拉OK”「彼らはよくカラオケに行く。」と言い、“出去”を使い、「歌う」は分かり切ったことなので、訳さないのが一般的である。ここにも目的の違いによる表現の違いが出ている。日本語はそれができない言語である。日本語はこういう場合、家に視点があるので、いずれにしろ自分のいる家から離れる「行く」しか使えない。次に“去”を用いている文を見てみよう。

（6）渐渐地，她喜欢去找我妻子了。（『人民』95 － 6 － 99）
次第に彼女は妻の勤め先に行くようになった。（同上、95 － 6 － 98）

（7）“请语文课代表到教研组去，王力也去。”（『人民』88 － 1 － 95）
「国語のクラス委員は職員室へいらっしゃい、王力もいっしょに」（同上、88 － 1 － 96）

（8）过后就真的给她打电话，请她去跳舞，而且还挺频繁的。（『人民』95 － 6 － 99）
その後、実際に彼女に電話をかけ、ダンスに誘った。しかもかなり頻繁に。（同上、95 － 6 － 98）

---

[7] 今冨正巳（1995：3）では、「学習者が中日翻訳にあたるとき、まずいわゆる「直訳」を行い、ついでそれを基礎にして自然な、きれいな日本語に移すことが望ましい。」（p.3）、と述べている。

[8] 彭広陸（2016）では、先行研究の「視点」を分析し、中日両言語の名詞を中心にして、両言語に視点の違いのあることについて多くの実例を挙げて述べている。今冨正巳では視点の違いが明確に述べられていない。

(9) 那天，跟妻子讲好我不回去吃饭了。(『人民』95 － 6 － 99)

その日、夕食には帰らないからと妻に言った。(同上、95 － 6 － 98)

(10) “那，人反正不在了，我就不回去了，你捎上二百块钱吧。”姨好像为难地说。(『人民』95 － 5 － 99)

「まあ、いずれにしても死んじまったわけね。私は行かないことにするよ。二百元持って行ってね」と、おばは何だか苦しげだ。(同上、95 － 5 － 98)

例(6)の“去找我妻子”の“去”は「行く」と訳されているので基本訳だが、“找我妻子”は「妻を訪ねる」ではなく「妻の勤め先に」と訳されているので「意訳」[9]である。例（7）の“到教研组去”「職員室へいらっしゃい」の“去”は「来る」の丁寧態「いらっしゃい」で訳されている。これも中日両言語の視点の違いから来る訳である。中国語では、その場から離れるので“去”を使っているが、日本語は話題の場所が「教員室」なので、生徒はそこに「来る」ので丁寧態の「いらっしゃい」を使っている。もう一つの“去”は「いっしょに」と訳されているので意訳である。例（8）の“请她去跳舞”「ダンスに誘った」の“去”は訳されていないので「不訳」であるが、全体では意訳である。“请她跳舞”は「彼女をダンスに誘った」と訳すが、中国語ではダンスホールに行かなければならないので、原文に“去”を入れているが、日本語ではダンスをするためにはダンスホールに行かなければならないので、「行く」は省略されている。“跳舞”だけであれば、「ダンスをする」の意味であるが、“请她去跳舞”を「ダンスに誘った」と訳したのは名訳である。「ダンスに誘った」だけで、「彼女を」の存在が分かるからである。

例（9）の“不回去吃饭了”を「夕食には帰らないから」と訳すのは意訳だが、この中の“回去”を「帰って行く」ではなく「帰る」と訳しているのは「減訳」である。例（10）の“不回去了”は「行かないことにするよ」と訳すのは「文化の違い」[10]である。文化の違いまで訳してあるこの訳はやはり名訳である。“我”は自分の母親のところへ行くのだから、中国語では当然“回去”を使う。日本語はすでに嫁いでから何十年も経っているので、「帰る」ではなく「行く」となる。

人名詞や代名詞“我、你、他／她”「わたし、あなた、彼／彼女」もよく使われる基本語であるが、中日両言語では文中への現れ方が異なる場合がよくある。両言語ではなぜしばしば表現が異なるのか、例文を見ながら検討してみよう。

(11) 杰和丛离婚时，不约而同地决定到当年插队落户过的鄂南小山村去旅游一次。(『人民』

[9] 本稿で「意訳」という場合は、今冨正巳(1995)の言う「直訳」を基礎とする自然な日本語で訳す場合である。
[10] 中国語は何十年たっても実家に行く場合は“回家”「実家に戻る」だが、日本語では嫁ぎ先が拠点となっているので、嫁ぎ先から実家に戻る場合であっても［行く］になる。ここには中日両国の文化に対する違いが現れている。

95 － 8 － 99）

傑と叢が離婚を決め、どちらが言い出したともなく、むかし生産隊で暮らした湖北省南部の小さな山村に旅行することにした。（同上、95 － 8 － 98）

⑿ 翌晨，杰和丛朝山坡上攀登，老远就望见那棵苦楝树依然健在，只是树干疮痍满目，脖子显得更弯，那根折断的枝桠处已新生出三根碗口粗的枝儿。（『人民』95 － 8 － 99）

翌朝、二人は山の斜面を登った。あのセンダンの木が今も健在であることが遠目で分かった。ただ幹は傷だらけで、首はさらに曲がり、あの折れた木のまたから、お碗の口ほどの太さの新しい枝が三本生えていた。（同上）

⒀ “真是你么？”（『人民』91 － 2 － 96）

「ほんとうに、あなた？」（同上、91 － 2 － 97）

⒁ 杰问：“你在想什么？”（『人民』95 － 8 － 99）

「何考えてる？」と傑がきいた。（同上）

⒂ “我也不会游泳呀，这二月的天……”（『人民』91 － 2 － 96）

「オレも、泳げないんだ。それに二月だし……」（同上）

⒃ 丛说：“我忽然想起了那棵苦楝树来……”（『人民』95 － 8 － 99）

「あのセンダンの木をふと思い出したの」と叢が答えた。（同上）

⒄ 他刚刚失恋，女友的绝情令他痛不欲生。（『人民』95 － 12 － 85）

彼は最近失恋した。彼女の心変わりに絶望し、死にたいとまで思った。（同上、95 － 12 － 98）

⒅ 这不，今天他又要给全局干部职工作报告了。（『人民』91 － 7 － 96）

そう、局長はきょうもまた、全局の幹部職員に報告をすることになっている。（同上）

例（11）（12）の“杰和丛”は「傑と叢が」（例 11）と「二人は」（例 12）に訳されている。なぜ訳し方が異なるのか。例（11）は対応しているが、例（12）は意訳である。例（13）と（14）の“你”は「あなた」（例 13）と不訳（例 14）である。例（15）と（16）の“我”は「オレ」（例 15）と不訳（例 16）である。例（17）（18）の“他”は「彼は」と職階「局長は」で訳されている。どちらも対応しているが、訳し方が異なる。

上記の原文と訳文から、中国語の人名詞は「人名」や「人数」などで訳せ、代名詞は「代名詞」「不訳」「職階」[11] で訳せると言える。原文の中国語が一つだけなのに対して、訳文の日本語は複数ある。この点から、中国より日本の社会のほうが社会における上下関係が明らかであ

[11] 彭広陸（2016：pp.29 ～ 30）では、中日両言語の違いとして呼称語の一つとして代名詞をとりあげているが、それほど詳しくはない。

り、人名に対する呼称が複雑だと言える。「言葉は現実を反映する」[12] という観点から見れば、日本語のほうが、人間関係がやや複雑だと言えるであろう。なお、中国語では「紹介」を表現する場合も、以下のように代名詞の異なる場合がある。

(19) 我给你们介绍一下儿，这是我爸爸、妈妈。(『実用』2 − p.208)
　　紹介します。私の父と母です。(筆者訳)

(20) 我给你们介绍一下儿，他（这）是我的同班同学。(作例)
　　紹介します。私の同級生です。(筆者訳)

(21) 这是谁？这是我同学。(作例)
　　だれ？ クラスの子よ。(筆者訳)

(22) 他是谁？他是我同学。(作例)
　　だれなの？ 同級生よ。(筆者訳)

中国語では、相手に紹介する対象が紹介する本人にとって親しい関係であれば、“这”（例19，20）を使い、一般的な場合であれば、“他”（例20）を使う。例（20）では、“这”を使えば親しい関係を表し、“他”を使えば一般的な関係[13] を表す。例（21）（22）は同一場面であると仮定できる。例（21）には“这”を使い、例（22）には“他”を使っている。同じ意味ではあるが、前者は親友、後者は同級生という感覚である。中国語は一般に主体を省略すると、誰が対象なのか分からなくなるので主体を省略（例19 ～ 21）できないが、日本語は一般に中国語の主語“这”“他”を訳さない。日本語は主体がなくても、出来事を表す述部によって誰が話し、誰が主体であるかが分かる（例19 ～ 21）[14] からである。

4. 中日両言語のリズムについて

中日両言語にはそれぞれリズムがある。中国語は2や4の偶数のリズム、日本語は575の奇数のリズムが基本である。翻訳では一般にリズムまでは出せず、このリズムは原文を学ばなければなかなか理解できない。ここに外国語を学ぶ価値がある。しかし、各言語のリズムに対する美しさ[15] は説明しないと、外国人には分からないようである。

あるとき、授業中に日本人の学生に中国語の粋である李白の『静夜思』と張継の『楓橋夜泊』

---

[12] 言語学研究会鈴木康之グループでは、論文執筆の原則として、「論文1編につき実例を300例以上の収集」「体系からの分析」「言葉は現実を反映する」の3点を挙げている。
[13] 高橋弥守彦（2014）では人間関係による表現上の違いを身内型表現と他人型表現と言っている。
[14] 一般的には、中国語は主体を必要とする言語であり、日本語は主体を必要としない言語である、と言える。
[15] 中国語は《诗经》の一句4字や五言絶句の「2＋3」のリズムが基本である。日本語は「575」のリズムが基本である。

の唐詩二首を教えたことがある。例（21）の五言絶句は「2 + 3」のリズムで、例（22）の七言絶句は「4 + 3」のリズムだと教えると、すぐに漢詩のリズムは分かったようであった。

(21) 床前明月光　　床前　月光明らかなり
疑是地上霜　　疑うらくは是れ　地上の霜かと
举头望明月　　頭を挙げて　明月を望み
低头思故乡　　頭を低れて　故郷を思う

(22) 月落乌啼霜满天　　月落ち烏啼いて　霜天に満つ
江枫渔火对愁眠　　江楓漁火　愁眠に対す
姑苏城外寒山寺　　姑蘇城外　寒山寺
夜半钟声到客船　　夜半の鐘声　客船に到る

幸い学生はほとんどが、これらの漢詩は中学や高校時代に習ったことがあるらしく、漢詩の意味はよくわかり素晴らしいという。漢詩は動画のように美しく展開する。漢詩のリズムも理論としては分かったようであり押韻も分かったようである。しかし、この絶句の漢詩のリズム「2 + 3」および「4 + 3」と押韻“光、霜、乡”（例 21）と“天、眠、船”（例 22）の美しさは理解できないという。日本人の学生にはどんなに説明しても中国語の詩のリズムと押韻の美しさが理解できないようであった。多分、幼いころに養われる中国語のリズムと、韻の美しさに対する中国文化が日本人にはないからだろう、と思われる。そこで、中国語の押韻の美しさを理解してもらうために、日本の人気芸人の綾小路公磨がテレビで紹介している「昔は乙女、今は太め」を紹介すると、すぐに日本人には日本語のリズムと韻を踏む「乙女、太め」の「め」の美しさが理解できた。中国語も同じだと説明すると、学生たちはよく理解できた、ということであった。

日本語のリズム「575」は松尾芭蕉の「閑かさや　岩にしみいる　蝉の声」などがある。この俳句は一枚の絵や写真のようである。この俳句のなかに日本の静寂がある。この「575」のリズムは歌詞のなかに受け継がれているようだ。たとえば、藤山一郎の歌う西條八十の作詞『青い山脈』と舟木一夫が歌う関沢新一の作詞、遠藤実の作曲からなる『学園広場』を見てみよう。

(23) 若く明るい　歌声に　　古い上着よ　さようなら
雪崩は消える　花も咲く　　さみしい夢よ　さようなら
青い山脈　雪割桜　　青い山脈　バラ色雲へ
空のはて　　あこがれの
今日もわれらの　夢を呼ぶ　　旅の乙女に　鳥も啼く

(24) 空にむかって　あげた手に　　涙流した　友もある
若さがいっぱい　とんでいた　　愉快にさわいだ　ときもある

学園広場で　肩くみあって　　学園広場に　咲いている花の
友とうたった　若い歌　　ひとつひとつが　思い出さ

例（23）（24）の歌詞はどちらも基本的には75調のリズムである。前者の歌は戦後の物資欠乏の時代を経て、経済成長期に入る時代を反映し、日本ではこの歌により経済成長期の新しい時代を迎えたという。若々しい生命力に溢れたこの歌は戦前・戦中の犠牲を強いる暗い思想に別れを告げ、アメリカ型の新しい思想にぴったりと合ったのであろう。後者の歌は若者たちの夢のある高校生活を反映している。日本でいちばん夢のあった時代だと言われている。しかし、この歌詞の意味は分かっても、この伝統的なリズムは原文でなければなかなか理解できない。歌詞のなかに日本の伝統的なリズムが残り生かされたのである。

中国の漢詩と日本の歌詞は両国を代表するリズムであるが、現在でも中日両言語の一般の文章に、このリズムが生きている。中国語は、一般に句読点の間隔は10文字（5＋5）前後であり、14文字（7＋7）を超えると呼吸の問題で発音しづらくなる。日本語は12文字（5＋7）前後であり、17文字（5＋7＋5）を超えると発音しづらくなる。この音節数も中日両国における伝統文化のリズムを受け継いでいる。

(24) 丈夫开会回来，将肥皂涨价的绝密情报告诉了胖嫂，她就再也睡不着了。胖嫂在临街开了家小卖铺。从前，整个县城一个饭馆，一个商店就够了。如今，三步一个饭馆，两步一个小卖铺，照样个个赚钱。（『人民』89－9－98）

会議から帰ってきた夫が、枕辺で、「絶対機密情報」を話したばかりに、ふとっちょおばさんは、もう眠れなくなってしまった。ふとっちょおばさんは、通りに面して小さな雑貨屋を開いているのだ。以前には、県の町に、一軒の飯屋、一軒の商店でこと足りていた。ところがどうだろう。今では、三歩あるけば一軒の飯屋、二歩あるけば一軒の小商店、という具合に、どの家でも決まったように、これ金もうけ。（同上）

(25) 我一遍又一遍地徘徊在局长大门口那段水泥路上，不敢推门而进。我很清楚地记得往日局长那一张生硬的脸和一双凸出的眼是怎样把我打发走的。如果现在我闯进去一定会惹局长大人发怒，那样我的事肯定要砸锅；但如果今晚不说，明天就糟糕了；我已获得了最准确的消息，明天上午局领导开会要研究此事。（『人民』89－7－101）

私は局長邸の門前のコンクリート道路を何度も行きつ戻りつしているが、開けて入る勇気がない。このあいだ、局長があのこわばった顔とぎょろっとした目で、どういうふうに私をあしらって追い出したか、はっきり覚えている。もしいま入って行けばきっと局長サマのお怒りを買う。そうなったら私の頼みごとはもちろんめちゃくちゃだ。だが、今晩話しておかなければ、明日ではもうまずいのだ。私が得た最も確実な情報によれば、明日の午前中に局のえらい人が会議を開いて、この件を研究することになっ

ている。（同上）

例（24）は 15 文字の“将肥皂涨价的绝密情报告诉了胖嫂”の部分を除いて、基本的には 10 文字前後以下なので、それぞれが呼吸をとりやすく発音しやすい分文である。また、その中の“从前，整个县城一个饭馆，一个商店就够了。”と“如今，三步一个饭馆，两步一个小卖铺，照样个个赚钱。”とは、対比の手法により書かれているので、リズム感があり読みやすくなっている。日本語訳は 20 文字「通りに面して小さな雑貨屋を開いているのだ」を除いて、12 文字前後以下に訳されているので呼吸がしやすく読みやすい。例（25）は“不敢推门而进”“那样我的事肯定要砸锅；但如果今晚不说，明天就糟糕了；我已获得了最准确的消息，”以外は、いずれも 14 文字以上あり、長すぎて呼吸がし難く、発音し難い文である。日本語訳も「開けて入る勇気がない」「はっきり覚えている」「だが、今晩話しておかなければ、明日ではもうまずいのだ」を除くと、いずれも長すぎて読み難い。

5. おわりに

現代の最新の DNA 鑑定によれば、人類は約 650 万年前、アフリカに誕生したが、160 万年前になると、人口が増え過ぎ、食糧獲得のために移動を始める。自然環境の違いにより、特に太陽光線の多少により、北に移動した人たちは白人となり、アジアに来た人たちが黄色人種となり、南に移動した人たちが褐色人種となった。

アフリカからアジアに移動してきた人類は、中日両国の自然環境、社会環境、歴史進展の違いにより、民族性に大きな違いが出てくる。土地が広く、競争が激しく、革命を肯定する中国人は、自己主張や競争意識などが強く、何事においても積極的である。強力な反対勢力があることを想定し、仲間同士の協力や団結心も強い。一方、温和な自然環境、安定した社会環境、歴史的に革命を肯定しない日本人は、相対的に人の感情を配慮し、上司の命令をよく聞き、発言や行動もかなり慎重である。同年代の仲間意識は薄いが、トップを中心とする縦の関係は固いようである。社会経験を積めば積むほど、こうなる傾向にあるようである。中国は横社会、日本は縦社会と言えるであろう。たとえば、中国では大洪水が発生すると、人民解放軍が出動するが、各職場からは義捐金や物が供出され、物資を積んだトラックが現地に派遣される。日本では政府が中心になって自衛隊が物資の援助や災害援助に行く傾向にあり、民間人は政府の呼びかけによってボランテアで行くようである。

中文日訳や日文中訳を通じて、中日両言語は基本的には対応関係にあると言えるが、原文と翻訳の違いから中日両国民の思考方式に違いのあることが分かる。中国人はマクロ的にものを考え、全体を考慮の対象に入れる傾向にあるが、日本人はミクロ的な思考方法であり、細部に

注意を払う傾向にある。中日両言語のリズムからみれば、中国語は相対的に文が短く、五言絶句・七言絶句・八言律詩が基本にあり、日本語は相対的に長く、俳句や和歌のリズムが日本語の基本的なリズムになっていると言えよう。

中国で日本語を教え、日本で中国語を教えている経験から言えば、語学教育を通じて両国の民族性に大きな違いのあることが感じられる。それが中日両国の言語表現と民族性とに反映している。中国人はいろいろな場面で積極的であり、日本人は慎重のほうである。中日両国民は民族性の違いがあるとは言え、グローバル化とはそれぞれの民族がそれぞれの考え方を述べ、意志の交流をはかり、相手の考えを理解することなので、なるべくデーターや客観的な意見に基づいて、相互理解を深め、相互発展を促進することによって、戦争のない平和な世界を築くことである。私たち言語教育に携わっている教員は言語を通じて言語を教えるだけでなく、文化や習慣を通して、民族が交流する手助けをし、言語教育が世界平和の一助になれるよう、言語教育を通じてそれを実現する基礎を築くことである。

言語資料

1. 『人民中国』ショートショート　人民中国雑誌社　1988 ～ 1996
2. 『中国語学講読シリーズ』①～⑥　柯森耀訳　北京外文出版社　1991
3. 『実用漢語課本』日本語版２　北京語言学院編　1991

参考文献

日本語文献

1. 今冨正巳（1996）『新訂中国語⇔日本語翻訳の要領』光生館
2. 朱徳熙著　杉村博文・木村英樹訳 (1995)『文法講義』白帝社『講義』
3. 杉村博文 (1994)『中国語文法教室』大修館書店『教室』
4. 蘇紅（2014）「敬語」『日本語と中国語』朝倉出版
5. 高橋弥守彦（2013）「中日両言語の視点について」『外国語学研究』第 17 号　大東文化大学大学院外国語学研究科
6. 高橋弥守彦（2014）「言葉と文化」 大連理工大学国際シンポジウム口頭発表
7. 苑崇利（2008）『日本文化概观』外语教学与研究出版社
8. 彭広陸（2016）「名詞の語彙的な意味における『視点』のあり方―中日両言語の比較を中心に―『外国語学研究』第 17 号　大東文化大学大学院外国語学研究科
9. 山本秀樹 (2002)「世界諸言語の語順類型研究における諸問題」『人文社会論争、人文科学篇』７弘前大学人文学部

10. 李臨定著　宮田一郎訳 (1993)『中国語文法概論』光生館
11. 刘月华等著 相原茂監訳（1991）『現代中国語文法総覧』くろしお出版

中国語文献

1. 郭锐 (2011)〈朱德熙先生的汉语词类研究〉《汉语学习》5 (总第 185 期)
2. 姜红 (2008)《陈述、指称与现代汉语语法现象研究》安徽大学出版社
3. 胡明扬 (2004)〈词类问题考察续集〉北京语言大学出版社
4. 吴长安 (2006)〈“这本书的出版”与向心结构理论难题〉《当代语言学》第 3 期
5. 高航 (2009)《认知语法与汉语转类问题》上海交通大学出版社
6. 施关淦 (1988)〈现代汉语的向心结构和离心结构〉《中国语文》第 4 期
7. 朱德熙、卢甲文、马真 (1961)〈关于动词形容词“名物化”问题〉《北京大学学报·人文科学》1961 年第 4 期
8. 沈家煊 (2009)〈我看汉语的词类〉《语言文字学》2009 年第 7 期　中国人民大学书报资料中心
9. 人民教育出版社中学语文室（1984）《中学教学语法系统提要（试用)》人民教育出版社
10. 孙德金 (2002)《汉语语法教程》北京语言文化大学出版社 略称《语法》
11. 齐沪扬主编 (2007)《现代汉语》商务印书馆 略称《汉语》
12. 李宇明 (1986)〈所谓的“名物化”现象新解〉《华中师范大学学报》1986 年第 3 期
13. 陆庆和 (2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社 略称《对外》
14. 吕文华（2008）《对外汉语教学语法探讨》北京语言大学出版社